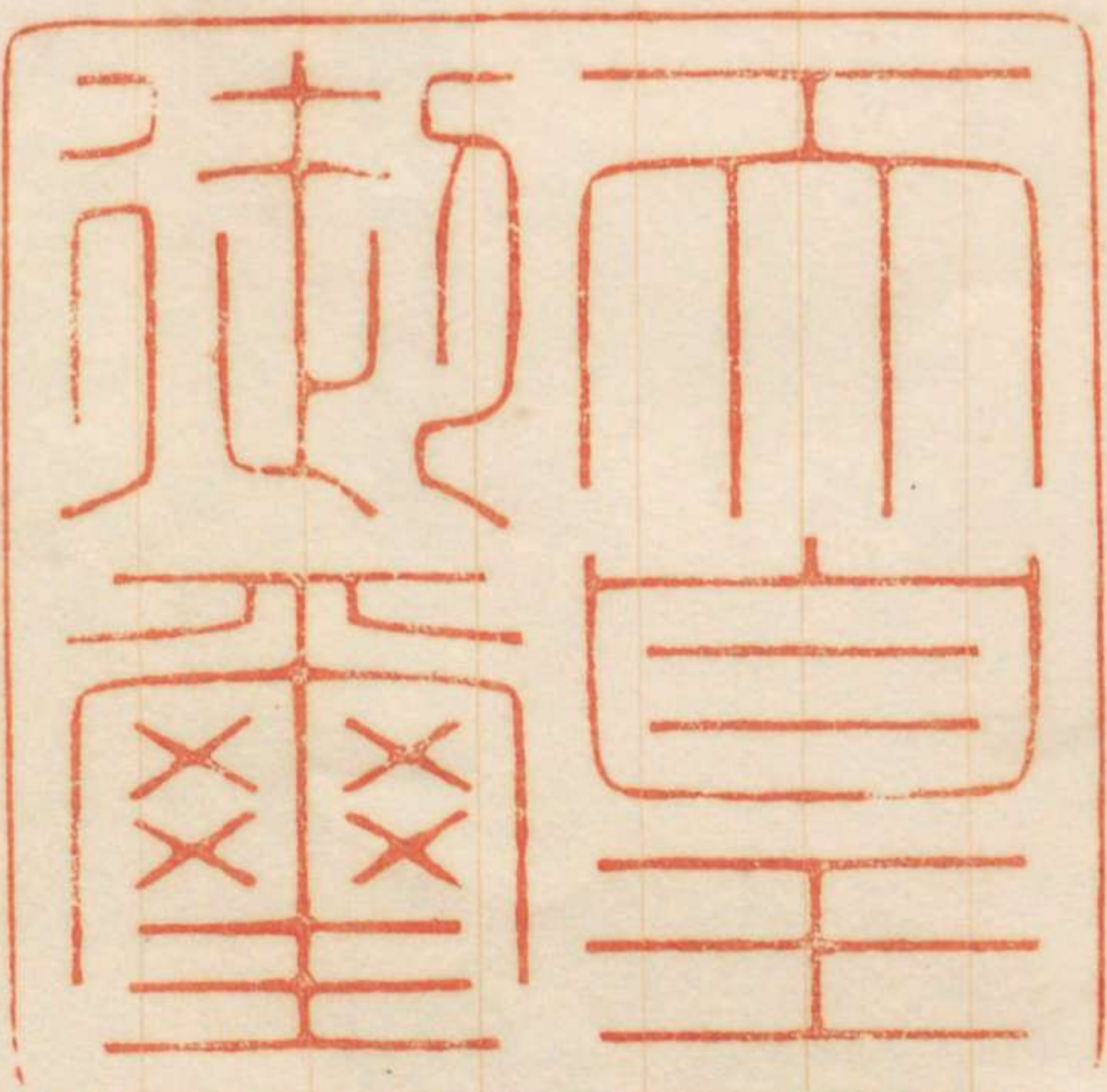


追加日清通商航海條約

終
外

朕明治三十六年十月八日清國上海ニ於テ朕カ
全權委員ト清國全權委員ノ記名調印シタル追
加日清通商航海條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セ
シム

睦仁



明治三十七年一月十九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎
外務大臣男爵小村 壽太郎

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ
明治參拾四年九月七日即光緒貳拾七年
七月貳拾五日北京ニ於テ調印セラレタ
ル最終議定書第拾壹條ノ規定ニ充分ノ
効力ヲ與ヘムカ爲メ日清兩國間ノ通商
關係ヲ簡易ニシ且増進セシムルヲ目的
トシタル追加通商航海條約ヲ締結スル
コトニ決シ之カ爲メ大日本國皇帝陛下
下ハ公使館壹等書記官從五位勲五等日

置益總領事正六位勲五等小田切萬壽之
助ヲ大清國皇帝陛下ハ工部尚書呂海寰
太子少保前工部左侍郎盛宣懷商部左侍
郎伍廷芳ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ
因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示
シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ條
項ヲ協議決定セリ
第壹條 清國ハ其ノ財政制度ヲ改正ス
ル目的ヲ有シ而シテ釐金制度ノ全廢ニ
依リテ生スヘキ缺損ノ一部ヲ填補スル

爲ノ海關又ハ内地及國境ノ稅關ヲ通過
スル各種貨物ニ對シ關稅ノ外ニ附加稅
ヲ徵收スルコトヲ提議シタルヲ以テ日
本國ハ清國カ各條約國ト協議ノ上決定
スルモノト同率ノ附加稅ヲ支拂フコト
ヲ承諾ス
清國ノ徵收スル生產稅消費稅機械製造
品稅又内國產鴉片及鹽ノ稅ニ關シ日本
國ハ各條約國カ清國ト協議決定スヘキ
同一ノ取極ニ依ルコトヲ承諾ス

但シ本條ノ爲ノ日本國ノ貿易權利及特
權ハ他國ノ貿易權利及ヒ特權ニ比シ何
等不利益ノ地位ニ置カルルコトナカル
ヘキコト勿論タルヘシ

第貳條 清國政府ハ日本國汽船所有者
カ自己ノ費用ヲ以テ揚子江宜昌重慶間
ノ急流曳上セノ爲メニ設備ヲ爲スコト
ヲ承諾ス然レトモ右ハ四川湖南湖北各
省人民ノ利害ニ關スル處アルヲ以テ其
ノ設置前清國海關ノ認可ヲ得ルコトヲ

要ス

右設備ハ汽船及清國形船舶共ニ之ヲ使
用スルコトヲ得ヘキモノニシテ水路又
ハ清國形船舶ノ自由航行若ハ沿岸道路
人民ノ交通ヲ妨クルコトヲ得ス右設備
ニ關シテハ清國海關ニ於テ制定スヘキ
特別規則ニ從フヘシ
第參條 清國政府ハ内河航行ニ適スル
各種ノ日本國汽船カ清國海關ニ届出テ
上内地水路汽船航通規則及同追加規

則ニ依リ貿易ノ目的ヲ以テ清國開港場
ヨリ其ノ届出テタル内地ニ航行スルコ
トヲ承諾ス

第四條 清國臣民ニシテ日本國臣民ト
共同シテ正當ナル目的ヲ以テ組合又ハ
會社ヲ組織スル場合ニハ契約又ハ覺書
竝定款及右ニ基キ作りタル細則ニ據リ
右組合及會社ノ各負ト共ニ公平ニ損益
ヲ分ツモノトス又右清國臣民ハ自ラ承
認シ且日本國裁判所ノ解釋ニ從フヘキ

該契約又ハ覺書竝定款及右ニ基キ作り
タル細則ニ定メタル義務ヲ履行スヘキ
モノトス若清國臣民ニシテ斯ク定メタ
ル處ノ義務ヲ履行セサルカ爲メ訴訟ヲ
提起セラレタルトキハ清國裁判所ハ直
チニ右義務ノ履行ヲ強制スヘシ
日本國臣民ニシテ清國臣民ト共同シテ
組合又ハ會社ヲ組織スル場合ニハ契約
又ハ覺書竝定款若ハ之ニ基キ作りタル
細則ニ據リ公平ニ損益ヲ分ツヘシ若日

本國臣民カ契約又ハ覺書竝定欵若ハ之
ニ基キ作りタル細則ニ定ノタル處ノ義
務ヲ履行セサルトキハ日本國裁判所モ
亦右同様直キニ義務ノ履行ヲ強制スル
コト勿論タルヘシ

第五條 清國政府ハ清國臣民カ日本國
臣民ノ有スル登録濟商標ヲ侵害スルヲ
禁遏スル爲ノ必要ナル規則ヲ設ケ且誠
實ニ之ヲ執行スヘキコトヲ約ス
清國政府ハ又清國語ヲ以テ編製シ且特

ニ清國人ノ使用ニ供スル爲ノ作製セラ
レタル書籍冊子地圖及海圖ニ關シ日本
國臣民ノ有スル登録濟版權ヲ保護スル
爲ノニ必要ナル規則ヲ制定スヘキコト
ヲ約ス

清國政府ハ登録局ヲ設置シ商標及版權
保護ノ爲ノ今後同國政府ニ於テ制定ス
ヘキ規則ノ定ムル所ニ從ヒ其ノ保護ヲ
求ムル外國商標及版權ノ登録ヲ爲スヘ
シ

日本國法律規則ノ定ムル所ニ從ヒ正當ニ登録セラレタル清國商標及版權ハ日本國ニ於ケル侵害ニ對シ同様ノ保護ヲ受クルコト勿論タルヘシ
本條ハ清國ノ安寧ヲ害セムトスル公刊物ノ著作者所有主若ハ販賣人タル日本國臣民又ハ清國臣民ヲ法律ノ正當ナル進行ニ對シ庇護スルモノト解スヘカラス

第六條 清國政府ハ成ルヘク速ニ自ラ

進テ全國一定ノ貨幣制度ヲ創設シ全國一定ノ流通貨幣ヲ設備スヘキコトヲ約ス右流通貨幣ハ清國內ニ於テ日清兩國臣民均シク法貨トシテ自由ニ一切ノ租稅賦課及其ノ他ノ債務ノ辨濟ニ使用スルコトヲ得ヘシ但シ關稅ハ海關兩ヲ基礎トシ計算シテ支拂フコト勿論タルヘシ

第七條 清國各省ニ於テ商業者及一般人民カ普通及商業ノ爲メニ使用スル度

量衡ハ區々一定セス且政府ノ定メタル
本位ニ違ヒ清國及外國商人ノ貿易ニ障
碍アリ是ヲ以テ清國各省ノ總督巡撫ハ
其ノ時ノ狀勢ヲ詳查シ會同協議シテ一
定ノ本位ヲ商定シ上奏ノ上之ヲ採用シ
全國官民ノ一切取引ニ使用セシメ先ツ
開市場ヨリ實施シ漸次内地ニ及ホスヘ
キコトヲ約ス若新定ノ度量衡ト現行ノ
度量衡トノ間ニ差異アル時ハ其ノ差異
ノ額ニ應シ増減ノ上公平ニ算定スヘシ

第八條 光緒貳拾四年五月ノ内地水路
汽船航通規則及同年七月ノ追加規則ハ
實行上不便ノ箇處アルヲ以テ清國政府
ハ之ニ修正ヲ加ヘ本條約ニ右新規則ヲ
添付スヘキコトヲ約ス此等ノ規則ハ相
互ノ同意ニ依リ變改セラルルマテハ其
ノ效力ヲ有スルモノトス

第九條 日清兩國間ニ現ニ存在スル凡
テノ條約及約定ノ規定ハ本條約ニ依テ
改正又ハ廢止セラレサル限り茲ニ其ノ

効力ヲ確認ス又日本國ノ政府官吏臣民
通商航海運漕工業及一切ノ財産ハ大清
國皇帝陛下又ハ清國政府又ハ清國諸省
若ハ地方官衙ヨリ他國ノ政府官吏臣民
通商航海運漕工業又ハ財産ニ既ニ附與
セラレ又ハ將來附與セラレハキ一切ノ
特權免除及利益ヲ自由且完全ニ享受ス
ヘキコトヲ明ニ茲ニ規定ス

日本國政府ハ日本國ニ在ル清國官吏及
臣民ニ對シ帝國法律規則ノ許ス限り成

ルヘク優遇ヲ與フルコトヲ努ムヘシ
第十條 兩締盟國ハ直隸省ニ駐屯スル
外國軍隊及公使館護衛兵ノ總テ撤退シ
タル場合ニ於テ清國ハ直隸ニ自ラ進テ
外國人ノ居住及貿易ノ爲メ北京市内ノ
一地區ヲ開クコト竝之ニ關スル規則ハ
其ノ時ニ於テ雙方協議ノ上決定スヘキ
コトヲ約ス

清國政府ハ本條約批准交換ノ日ヨリ六
個月以内ニ既ニ外國貿易ニ開カレタル

港市ト同一ノ條件ヲ以テ湖南省長沙府
ヲ外國貿易ノ爲メニ開クヘキコトヲ約
ス同開港場在留外國人ハ清國居住民ト
同シク地方及警察規則ヲ遵守スヘク清
國官廳ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ該條約
港區域内ニ自己ノ地方役場又ハ警察ヲ
設置スルコトヲ得ス

清國政府ハ本條約批准交換後直チニ各
國人ノ居住及貿易ノ爲メ自ラ進テ盛京
省奉天府及同省大東溝ヲ開クヘキコト

ヲ約ス外國人ノ使用ニ供スル爲メニ適
當ナル地域ノ撰擇竝外國人ノ居住及貿
易ノ爲メ定メラル場所ノ規則ハ日清
兩國政府協議ノ上之ヲ定ムヘシ
第十壹條 清國政府ハ其ノ司法制度ヲ
改正シテ日本國及西洋各國ノ制度ニ適
合セシムルコトヲ熱望スルヲ以テ日本
國ハ右改正ニ對シ一切ノ援助ヲ與フヘ
キコトヲ約シ且清國法律ノ狀態其ノ施
行ノ設備及其ノ他ノ要件ニシテ日本國

カ満足ヲ表スルトキハ其ノ治外法權ヲ
撤去スルニ躊躇セサルヘシ
第十條 本條約ハ日本文漢文及英文
ニテ調印スヘシ然レトモ将来ノ紛議ヲ
避クル爲メ兩締盟國全權委員ハ日本文
本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ノ相違ア
ル場合ニハ其ノ相違ノ點ハ英文本文ニ
照ラシテ之ヲ決定スヘキコトヲ約ス
第十條 本條約ハ大日本國皇帝陛下
及大清國皇帝陛下之ヲ批准セラレハク

而シテ其ノ批准書ハ本日ヨリ六箇月以
内ニ成ルヘク速ニ北京ニ於テ交換スヘ
シ
右證據トシテ兩國全權委員ハ本條約ニ
署名調印スルモノナリ

明治參拾六年拾月八日即

光緒貳拾九年八月拾八日上海ニ於テ之ヲ作ル

大日本國條約改訂委員

公使館壹等書記官從五位勳五等日置 益印
總領事正六位勳五等 小田切萬壽之助印

大清國條約改訂委員

工部尚書

呂海寰

太子少保前工部左侍郎

盛宣懷印

商部左侍郎

伍廷芳

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治三十四年九月七日清國北京ニ於テ帝國外十箇國全權委員ト清國全權委員トノ間ニ記名調印シタル議定書第十條ノ規定ニ基キ明治三十六年十月八日上海ニ於テ帝國全權委員ト清國全權委員トノ間ニ記名調印シタル追加日清通商航海條約ノ各條目ヲ親シク閲覽點

檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル
所ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百六十三年明
治三十六年十二月九日東京宮城ニ於テ
親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム
御名 國璽

外務大臣男爵小村壽太郎印

追加内地水路汽船航通規則

第壹條 日本國汽船所有者ハ水路沿岸
ニ於テ貳拾五年ヲ起エサル期間清國
臣民ヨリ倉庫及埠頭ヲ賃借スルコト
自由ニシテ期限滿了ノ時ハ雙方商定
ノ條件ヲ以テ之ヲ繼續スルコト隨意
タルヘシ日本國商人ニシテ満足ナル
條件ヲ以テ清國臣民ヨリ倉庫及埠頭
ヲ賃借スルコト能ハサルトキハ地方

官吏ハ總督巡撫又ハ商務大臣ト協議
ノ上前記ノ如ク債借ヲ繼續シ得ルノ
條件ヲ以テ公平ナル時價ニテ貸渡ス
ヘキ倉庫及埠頭ヲ設備スルコトヲ取
計フヘシ

第貳條 埠頭ハ内地水路ヲ阻碍セス又
ハ航行ニ妨ナキ位置ニ限リ最近地方
ノ海關稅務司ノ認可ヲ得テ之ヲ築造
スルコトヲ得但シ右認可ハ故ナク之
ヲ拒ムコトヲ得ス

第參條 日本國商人ハ右倉庫及埠頭ニ
對シ其ノ附近ニ於テ同様ノ財産ヲ所
有スル清國人ト同様ニ諸稅及賦課ヲ
納付スヘキモノトス日本國商人ハ内
地運漕業ニ従事スル汽船ノ寄港地ニ
於テ前記ノ如ク債借セル倉庫ニ居住
シテ業務ニ従事セシムル代理人又ハ
雇員ニハ清國人ノミヲ使用スヘキモ
ノトス但シ日本國商人ハ其ノ事務視
察ノ為メ隨時自ラ該地ニ出張スルコ

トヲ得清國臣民ニ對スル清國ノ現存
管轄權ハ本項ノ為メ何等減損又ハ妨
礙セラレサルモノトス

第四條 清國ノ内地水路ヲ航行スル汽
船ハ沿岸又ハ其ノ上ニ於ケル建設物
ヲ毀損シ因テ以テ沿岸所有主ニ及ホ
シタル損失竝ニ諛毀損ノ為メニ生シタ
ル損失ニ對シ賠償ノ責アルモノトス
若清國ニ於テ小汽船ノ某淺水水路ヲ
使用スルコト沿岸ヲ傷害シ接近地ニ

損害ヲ
セムト欲
タル日本國
ルヲ認メタ
諛水路使用
シ清國小汽
禁止セラレ
外國小汽船及清國小汽船ハ現時内地
水路ニ設置セル堰閘ノ工事ヲ傷害シ
因テ以テ地方人民ノ用水ニ損害ヲ及



内
外

トヲ得清國臣民ニ對スル清國ノ現存
管轄權ハ本項ノ為メ何等減損又ハ妨
礙セラレサルモノトス

第四條 清國ノ内地水路ヲ航行スル汽
船ハ沿岸ニ於ケル建設物
ヲ毀損シ因テ沿岸所有主ニ及ホ
シタル損失ニ對シテ以テ沿岸所有主ニ及ホ
ル損失ニ對シテ該毀損ノ為メニ生シタ
若清國ノ汽船ノ其淺水水路ヲ
使用ス



損害ヲ及ホスノ虞アル為メ之ヲ禁止
セムト欲スル場合ニ其ノ交渉ヲ受ケ
タル日本國官吏ハ其ノ故障ノ確實ナ
ルヲ認メタルトキハ日本國小汽船ノ
該水路使用ヲ禁止スヘキモノトス但
シ清國小汽船モ亦均シク其ノ使用ヲ
禁止セララルコトヲ要ス
外國小汽船及清國小汽船ハ現時内地
水路ニ設置セル堰閘ノ工事ヲ傷害シ
因テ以テ地方人民ノ用水ニ損害ヲ及

ホスヘキ虞アル箇所ニ於テハ之ヲ通
過スルコトヲ禁ス

第五條 日本國政府ニ於テ清國ノ内地水
路ヲ汽船ノ航行ニ開放セムト欲スル
主旨ハ内外商品ヲシテ迅速運輸ノ便
宜ヲ得セシメムトスルニアルヲ以テ
同政府ハ現今又ハ今後清國ノ内地水
路ニ使用セララルル日本國汽船ハ其ノ
所有者ニ於テ之ヲ希望スルトキハ右
等汽船ノ清國會社ニ轉賣セラレ同國

國旗ノ下ニ移サルルコトニ何等阻碍
スル處ナカルヘキコトヲ約ス

清國法律ニ依リ登録セラレタル清國
會社ニシテ清國ノ内地水路ニ於テ汽
船ノ航行ヲ業トスルモノ設立セラ
ル場合ニ於テ日本國臣民カ該會社ノ
株主タルノ事實ハ其ノ汽船ニ日本國
國旗ヲ掲クル權利ヲ附與セサルモノ
トス

第六條 登録セラレタル汽船及其ノ曳

船ハ清國形船舶カ從來常ニ禁止セラ
シタルト同様禁制品ヲ輸送スルコト
ヲ禁ス本規定ニ背キタルトキハ此ノ
種ノ違犯ニ關シ條約ニ規定セル罰ヲ
課シ且該船ノ携帶スル内地水路航行
證ヲ取消シ該船ハ爾後内河航行ヲ禁
止セララルヘシ

第七條 汽船ノ來航ニ慣レサル内地居
住民ヲシテ之カ為メ成ルヘク騷擾セ
シメサラムコト望マシキニ因リ從來

汽船ノ往復セサル内地水路ハ商人ノ
便宜ニ應シ成ルヘク漸次ニ之ヲ開放
シ且汽船所有者ニ於テ其ノ業務ニ利
潤アルヘキ見込アルトキニ限り開放
セララルヘシ

從來汽船ノ往復セシコトナキ水路ニ
其ノ航通ヲ開カムトスル場合ニ於テ
ハ先ツ最近開港所在稅務司ニ其ノ旨
ヲ申出テ該稅務司ハ之ヲ商務大臣ニ
通牒シ同大臣ハ該地方ノ總督又ハ巡

撫ト協同シテ本件ニ關スル總テノ情
狀ヲ詳查ノ上直ニ許可ヲ與フヘキモ
ノトス

第八條 登録汽船ハ一港内ニ於テ又ハ
開港ヨリ他ノ開港ヘ又ハ開港ヨリ内
地ヘ及内地ヨリ右開港ヘ往復スルコ
トヲ得又該船ハ海關ヘ正式ノ届書ヲ
差出シタル上航行ノ途中通過スル場
所ニシテ貿易地ト認メラレタル所ニ
於テ乗客又ハ荷物ヲ陸揚又ハ搭載ス

ルコトヲ得但シ清國政府ノ承諾ヲ得
タル場合ヲ除クノ外專ラ内地間ノミ
往復スルコトヲ得ス

第九條 荷船又ハ客船ハ汽船ニテ曳ク
コトヲ得曳カレ行ク船舶ノ舵手及乗
組人ハ清國人ニ限ルヘシ總テ船舶ハ
其ノ所有者ノ何人タルヲ問ハス内地
ヘ向ケ航行スルニ先チ登録ヲ受クル
コトヲ要ス

第十條 本規則ハ光緒貳拾四年五月及

七月發布ノ内地水路汽船航通規則ノ
追加ニシテ右五月及七月ノ規則ニシ
テ今回協定ノ規則ニ依リ改メラレサ
ル條項ハ全然有效トス
本規則竝光緒貳拾四年五月及七月ノ
各規則ハ今後必要ニ應シ雙方ノ同意
ヲ以テ改正スルコトヲ得ヘシ
明治參拾六年拾月八日即
光緒貳拾九年八月拾八日上海ニ於
テ之ヲ作ル

日 置 益印
小田切萬壽之助印
呂 海 寰
盛 宣 懷 印
伍 廷 芳



内

階